第回 30 回歴史リレー講座「隋使の難波津から推古朝の小墾田宮へのルートをめぐって」

千田 稔氏（H29.3.19）

隋使と遣隋使はよく似た言葉ですが、隋使は隋から日本に派遣された人のことです。そして遣隋使といえば、607 年に小野妹子が携えた国書に皇帝が激怒したことで有名です。ただ、問題の箇所は「日出ずる処の天子」の「日出ずる」ではなく「天子」。世界に唯一の呼称を自分以外の人間が使ったからです。

では、なぜその後も両国の外交は続いたのか。大国といえども、隋にとって日本と親交が深く海上戦に長けた高句麗は脅威でしたし、日本にしても仏教文化の導入という旨味がありました。隋と高句麗、両国とうまく付き合っていくために聖徳太子らは知恵を絞ったことでしょう。

日隋の交流に水運の要として貢献したのが大和川です。妹子が裴世清（はいせいせい）ら隋使を伴い瀬戸内海経由で難波津に到着したのが翌 608 年。日本は江口（地名）で飾り船 30 艘で歓迎し、新設の迎賓館で丁重にもてなしました。その後、一行は大和川を遡り海石榴市（つばいち）（現在の桜井市金屋）で飾り馬 75 匹で迎えられ、小墾田宮（飛鳥）を目指しました。これが理にかなった考えなのですが、当時すでに難波津から海石榴市までは陸路が通じており、この陸路を利用したとの説も存在します。ただし、多くの点において整合性に欠けることは否めません。また、『日本書紀』には「8 月 3 日唐（隋）の客、京に入る」と記載されています。飛鳥への途上、桜井あたりに「京」と呼ばれる特別行政区域があったのではないでしょうか。

難波津の詳しい場所は諸説あり、法円坂遺蹟で難波津での荷揚げ用と推測される 5 世紀代の茅葺倉庫群が発見されています。それにしては、北側を流れる川に対して梯子段が南側というのが腑に落ちません。『日本書紀』によると仁徳天皇の時代（5 世紀）、湿地帯だった大阪の堀江に水はけを良くするための用水路が造られました。この堀江を中心に大阪の町は発達、のちに「天下の台所」として栄えていきます。私は難波津の研究をしていたとき、大阪の実測図（明治 19 年）に奈良時代の地名「江之口（えのくち）」を見つけました。ここは隋使歓迎の記載に見られる江口のことで、奈良時代における海岸線近くに位置します。その東には「大津」という小字がありますが、土地条件に鑑みて難波津とは考えられません。

「江之口」の南には「三津寺（みつでら）」の地名が見えます。大阪市中央区に現在も残る地名「三津寺」は奈良時代の大阪湾沿いにあった「難波御津（なにわみつ）」の名を継承していると私は推測します。さらに、この東にある四天王寺の別名はなんと御津寺（みつでら）です。すなわち、難波津は現在の大阪市中央区三津寺町付近にあったというのが私の説です。今昔の地図を比較すると、大阪の海岸線は埋め立てにより徐々に西へ延びていったことが確認できます。港の場所を推定するには地形の変化を考慮に入れる必要があるのです。

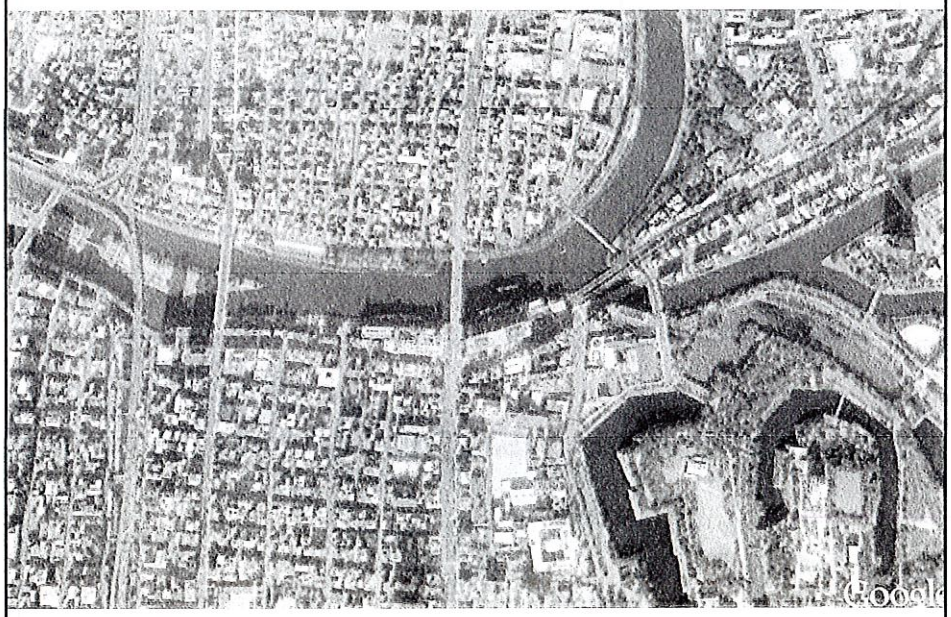
ちなみに、地名「難波」の起源は、長い船旅の末にやっと着いたことによります。また、天神祭で有名な大川の南にある地名「高麗橋」は、高句麗の人をもてなすための高麗館があったことが由来ともいわれます。のちにこの近くに隋のための迎賓館が造られたのも、2 国間の融和を図るという日本の思惑があったのかもしれません。

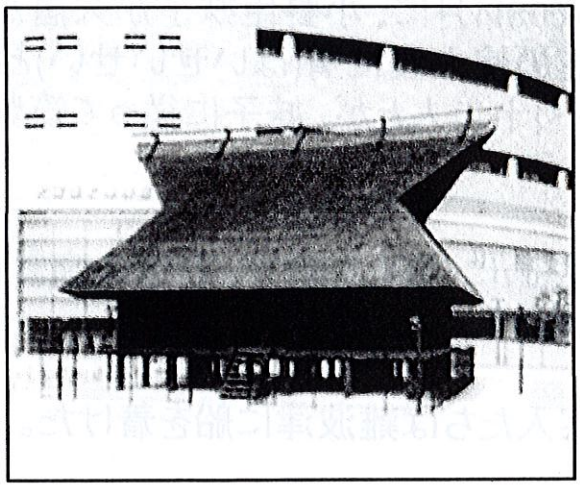
現在は堺へ向かって流れる大和川も、かつては河内国分を経て北西へ進んだのち淀川に合流していました。大和川水運のお陰で難波宮と大和との連携が保たれ、日隋の交流がスムーズに進んだことを考えれば、今こそ文化としての大和川、王寺という土地の重要性を再認識すべきです。

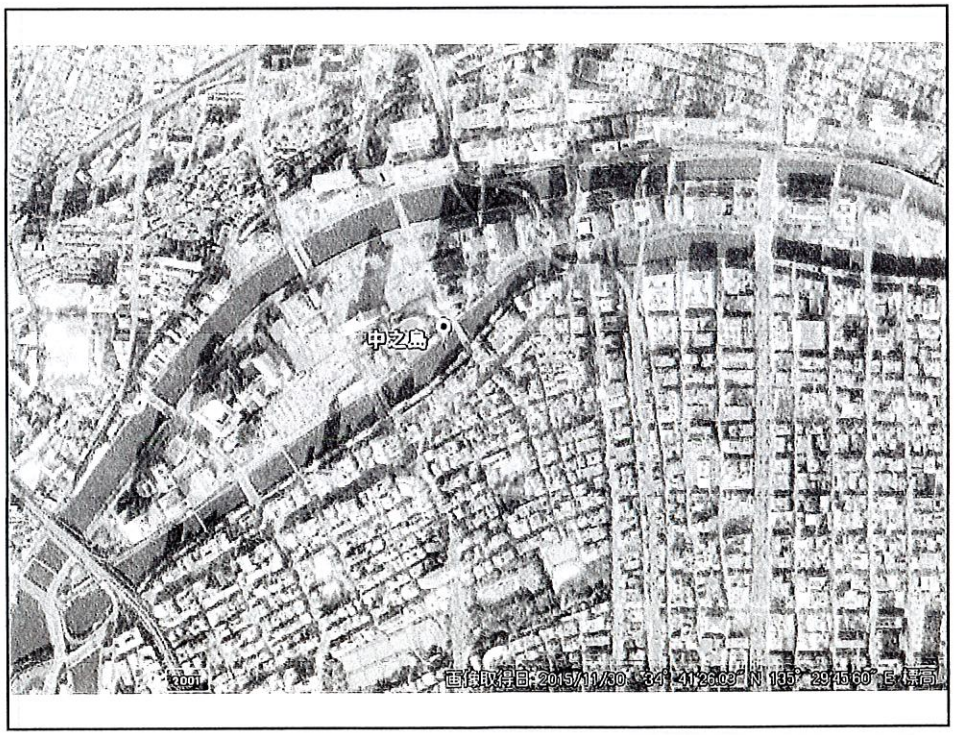
最後に、古代も現代もいうなれば権力社会です。私たち古代研究者が実際に扱うことのできる資料は意外にも限られています。時の政府が作ったからには内容が権力寄りなのは当然といえば当然。事実、奈良時代には華やかな文化の陰で多くの庶民が貧困にあえいでいました。真の研究者は表立った資料や種々の目新しい説の裏に潜む不都合な事実にも目を向けねばならないのです。

隋使の難波津から推古朝の小墾田宮へのルートをめぐって

千田　稔

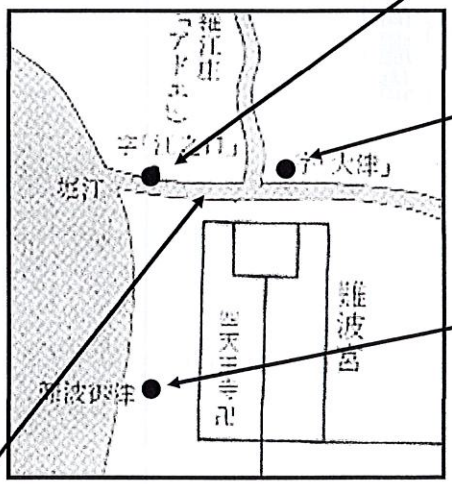





中之島
画像取得日:2015/11/30 34°41'26.09" N 135°29'15.60" E 標高

明治19年
大阪実測図

字「江之口」



江口
字「江之口」

字「大津」
（応神紀・仁徳紀）

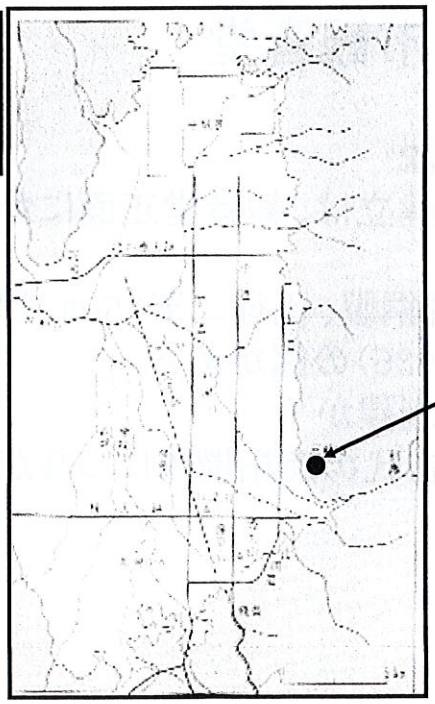
「三津寺」
↓
「難波御津」

堀江

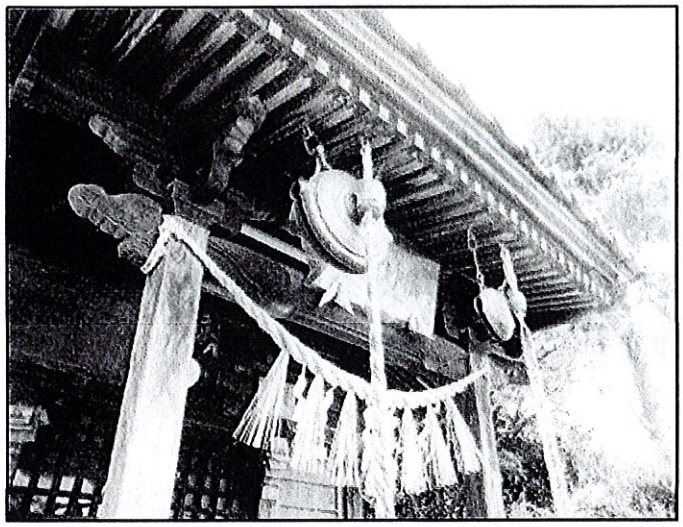
8月3日 唐(隋)の客、京に入る。是の日に飾騎（かざりうま）七十五匹を遣して、唐の客を海石榴市（つばきいち）のちまたに迎える。

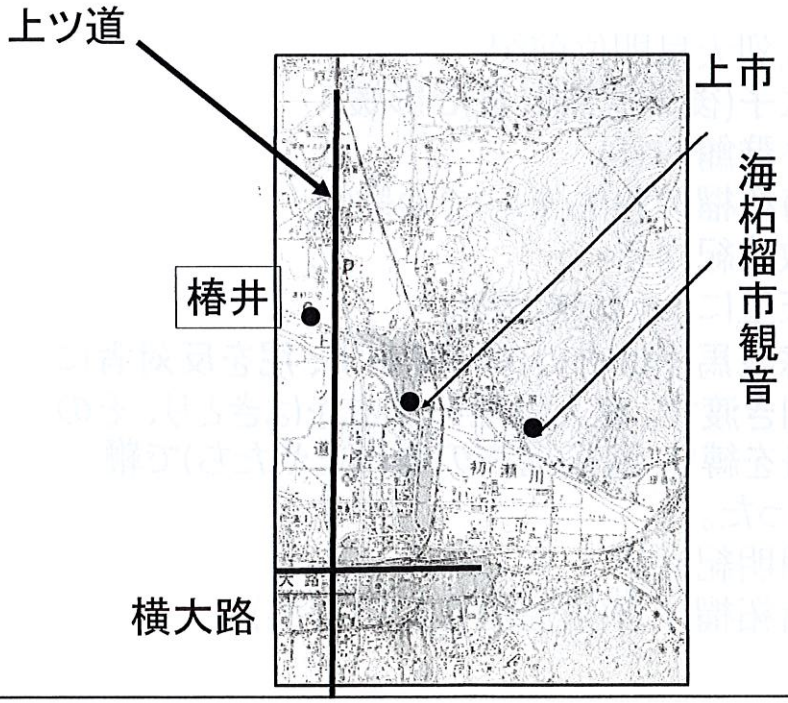
難波から大和川の水運で、海石榴市
⇒小墾田宮

海石榴市
(つばいち)



桜井市金屋？




上ツ道
上市
海柘榴市観音
椿井
横大路

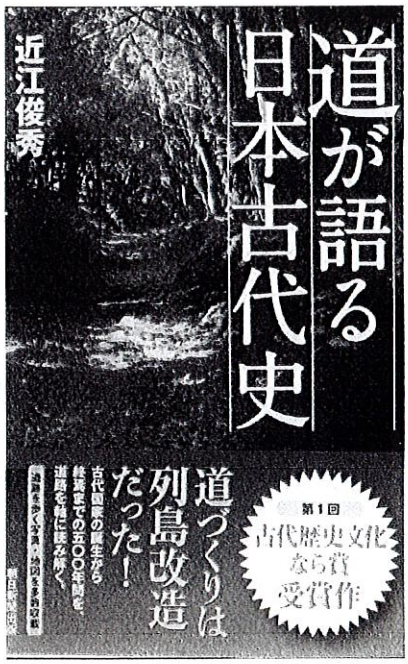
6月15日　難波津　泊

8月3日　隋使　海柘榴市

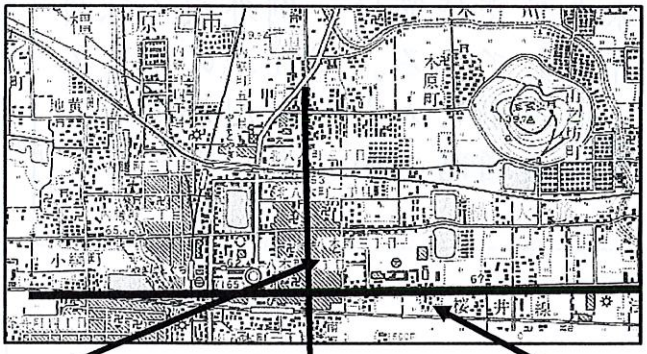
8月12日　隋使、朝廷へ

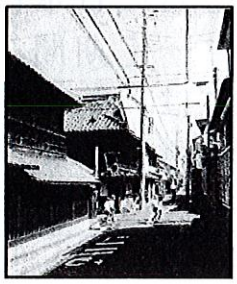
9月5日　難波の大郡で饗宴

9月11日



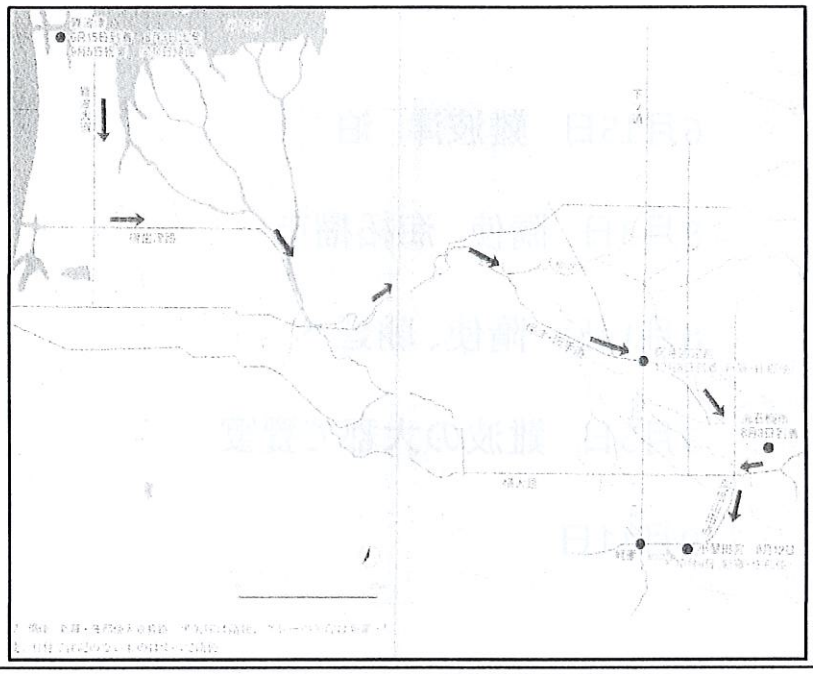
推古21年（613）難波から京にいたる
大道を開く(推古16年(608)4月に、
隋使裴世清が来る)

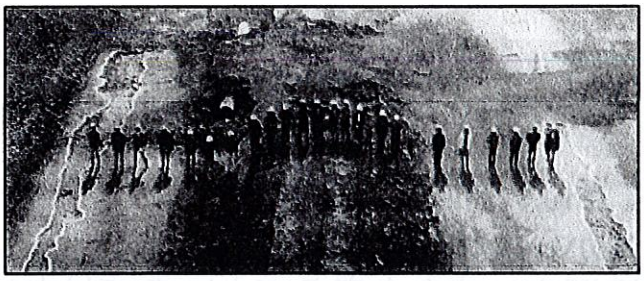




古代、衢や都城の四隅で、道饗祭という祭祀が行われていた。これは侵入しようどする悪霊を饗応し追い払う儀式であり、災いの予防を意味していた。

さらに飛鳥時代以前には、外国からの使者も都に入る前に、衢で留め置かれている。





大和川今池遺跡(難波大道)。
道幅は約17mあり、7世紀中ごろ

ご静聴ありがとうございました。